

太平洋の森から

2023年6月発行
No.43

「トモホン道の駅」はアジアの熱帯林を
守るしるしとなるか

『新版 森と魚と激戦地』三省堂書店からいよいよ発刊



地元の材、地元の伝統技術で完成したインドネシア初の「道の駅」（森を守る会代表の辻垣正彦による設計）



自然保護区に認定されたタボロ村（2015年には首長自ら太鼓を手に踊り私たちを歓迎してくれた）



原生林保全のために動きだしたマラクル村（マラクル村のスシ泉と子どもたち）

「トモホン道の駅」はアジアの熱帯林を守るしるしとなるか

代表 辻垣正彦

日本は国土の70%が森林である。フィンランドに次ぐ森林国である。

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」を1993年に創立して、かれこれ30年になる。カーボンニュートラルが言われてからも、世界の森の現状は変わっていない。

私は、建築家として設計する建築、住宅であれ、教会であれ、障害者の施設であれ、国産の木材を使い、地元の職人の手で建築されるように願い設計してきた。この意志は、55年の設計人生のなかでずっと変わらず、もう40年以上になる。

しかし、日本人全般の意識は昔とほとんど変わっていないように思える。グローバリズム経済の下、お金になることは前後の見境もなく投資し、環境破壊をこともなげに行ってしまう。

ウクライナで戦争が始まり、ロシアからの木材の輸入がとまる一方で、コロナ禍によりアメリカやカナダの住宅建設が急増したため、日本へ回す木材（原木ではなく加工材）が不足した。かといって、国産材がそれを急にカバーすることもできない。森を守るために枝打ちをし、間伐をし、下草を刈り、植林をし、立木を伐採し、原木市場へ出し、製材し、市場へ出すというすべての過程において、人手がもはやないのだ。日



本には1960年に44万人いた林業で働く人が現在たった3万人しかいないのだから、森林はあっても人手が不足し、材が出てこないのは当然である。自然を相手にするとはそういうことだ。

住宅もプレハブ化しカタログで選ぶ時代である。大工の手間を機械化によって奪い、職人の手間を機械で吸いあげることでセキスイハウス、住友林業、三井ホームなどは多大な利益をあげているが、他方で日本の誇る大工技術を亡ぼそうとしている。環境の破壊であるとともに文化の破壊である。

4年前からインドネシアで最初の「道の駅」である「トモホン道の駅」を設計し、コロナ禍を乗り越えて、今年2023年1月に竣工した。セレベス島の北端、マナド市から1時間のところにある人口7万人の小都市に



パプアニューギニア、マンガム村のビーチのマングローブ



マンガム村のゲストハウス

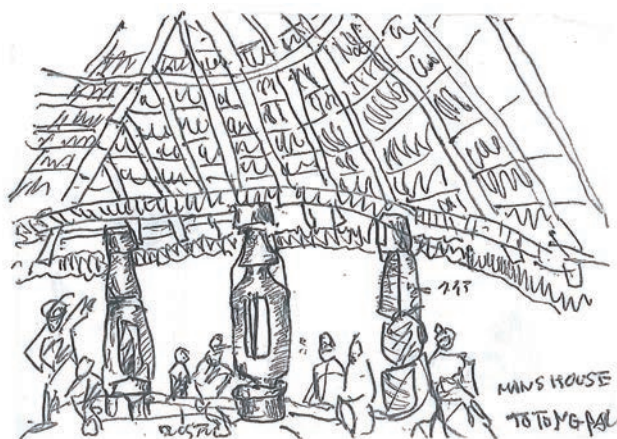
ある。赤道直下とはいえ、海拔1000メートルの高原都市であり、オランダ統治の影響でキリスト教徒が圧倒的に多い。市中心部の道の両側には、幾つかの宗派の十字架とステンドグラスに囲まれたコンクリート造りの教会が建っている。深い緑に覆われているが、原生林はなく、二次三次林に見える。この街の中心に近いところにこの「トモホン道の駅」は計画された。

ここでも、私の理念を表現した。「地元の材、地元の手」による建築である。

様式は地元の「ミナハサ様式」が基本となった。いたるところでこの様式の住宅が見られた。日本でいう入母屋様式とでもいうべきか。大工さんは電動の鋸や鉋のこぎりを使うことなく、木材を手加工し、レッカーかんを使うことなく上棟した。そのような地元の大工さんの仕事を通して、建具も天井や壁も地元の無垢材で納めることができた。

建具において日本では、工業化されてアルミサッシュが主流なのだが、トモホンではチーク材かまちどでの框戸である。2階の多目的ホールには直径40センチ、長さ8メートルのマホガニーの磨き丸太が4本大黒柱として据えられていて、2022年9月に訪れた竣工検査のときには、地元の材の象徴として輝いて見えた。南北の深いひきし庇に覆われた回廊は外壁に使われた板材を充分保護しており、雨の多い日本とインドネシア共通の様式を融合しているようだ。構造材の仕口、継手は地元の加工にまかせ、羽子板ボルトなどの金物には頼らない伝統を重んじ、木組みの美しさがじかに伝わってくる空間となった。

1階は放置されていたコンクリート造りの市場を取り込み、地元の材で天井と壁が覆われている。空間機能としては、住民の65%を占める農家のつくる有機野



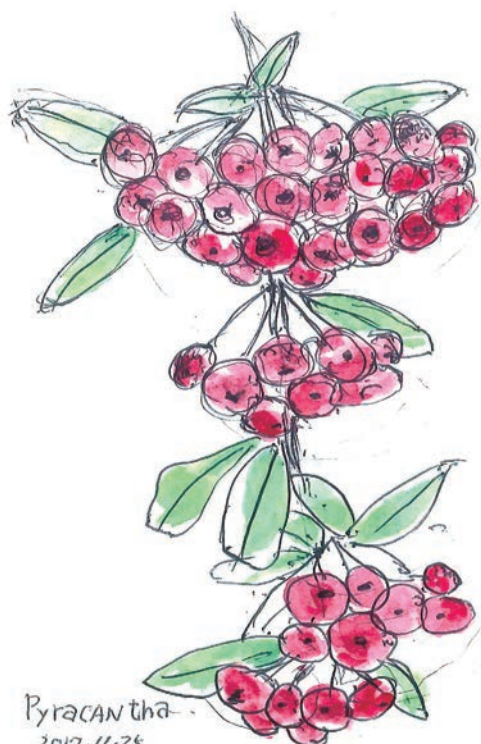
マンズハウス 男子のみの伝統儀式教育の場

菜や草花の直売所になり、市場整理と地域振興の要素の役を担うことを目標にしている。東には広いデッキがあり、2階からの外部階段は深い樹々に囲まれた庭とひと休みできる東屋あずまやにつながり、内、外空間のつながりを強調している。外来の客の観光案内所、休息の場であるとともに市場も併設され、地域住民の生活になくしてはならない「道の駅」となることを願っている。

日本の失いつつある伝統的木造建築技術が、インドネシアの大工技術と具体的技能を通じて表現できたことは真にうれしいものである。

JICA（国際協力機構）の援助「草の根技術協力事業」として協力し、小さな都市であるがトモホン市と千葉県南房総市がお互い協力してできたインドネシア初の建築である。地方の都市が日本にとどまらずアジアに目を向けその地域の振興に参与したことはとても意味があり、森を守り地球環境の破壊をとどめることにつながるプロジェクトになったと思う。

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」として30年間にわたって訴え続けてきたことが、インドネシアでも建築を通じて訴え、表現することができた。この「トモホン道の駅」を通して、これからの地域の人々に森の大切さと伝統的文化を再認識していただけるのではないかと考えている。



新型コロナウイルスの世界的感染拡大のなかでの近況 ニューブリテン島で自然保護区認定への活動が広がる

清水靖子

パプアニューギニアへの旅もままならぬ2020年からの3年間でしたが、現地の仲間たちからの通信を通して伝えられた森を守る動きを、皆さまにお伝えしたいと思います。

新型コロナウイルスのために、外部からの労働力と輸送船が不足したこともあって、パプアニューギニア現地での熱帯材伐採と丸太輸出量は減っています。これは、私たち原生林を守る側にとっては絶好のチャンスでもあります。世界最大の熱帯材消費国、日本がこうした状況にあって、日本の地元の材・地産地消へ転換するという絶好の機会であるべきだと強調したいと思います。

そうしたなかで、「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」が長年にわたって連帯を続けてきた原生林地域の村々での現状は、どうなってきたのでしょうか。

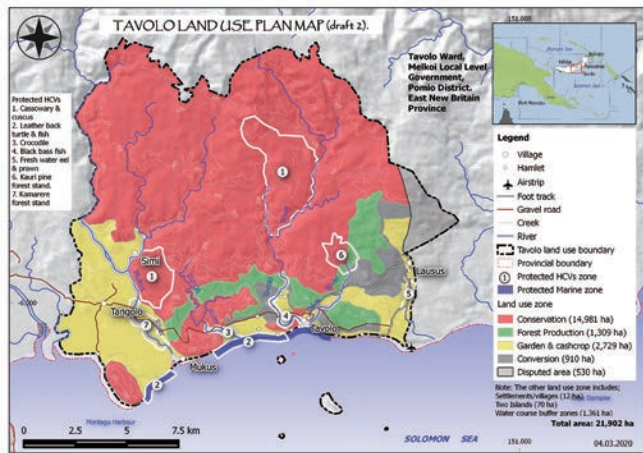
ニューブリテン島ナカナイ山系のタボロ地域

ニューブリテン島にかつてあった日商岩井伐採地に近い南海岸沿岸のタボロ地域は、ナカナイ山系の西端に位置し、山系からつづく原生林のなかに、幾筋もの川が注いでいる豊穡な土地です。

タボロ村のリーダーのピーター・キケレさんからの便りによると、タボロ村が守り続けてきた原生林（ムクス川とタボロ川周辺の3万2000ヘクタール）が、タボロ自然保護区として自然保護協会から認定され（2021年6月）、村人が一致団結して今も森を守りつづけているとのことでした。

前号でお知らせしたように、森を守る会は、その保全地域内の25か所に自然保護区の告知板を設置するための支援を行いました。





▲タボロ村の自然保護区を示す地図
赤が原生林保護地域

マラクル村を中心に原生林保全のための「セントラル・ナカナイ山系保全協会」たちあげ

私たちが最も力を入れて長年連帯をつづけてきたナカナイ山系中部南海岸、ジャキノット湾岸のマラクル村地域。

地球最後の「原生林の水の秘境」ともいえる村々には、長い年月をかけて石灰岩の地底を通った地下水が随所からあふれ出て、「スシ泉」や「ワラ・カラップ滝」、あるいは大小の川となり、淡水と海水の会おう類いまれな貴重な生態系をつくりだしてきました。奥地には果てしなく広がる原生林と深い洞窟群があります。

若手のリーダーであるイギー・マタピアさんからの便りによると、この保全を考え始めたのは2014年以来であり、時を経て「セントラル・ナカナイ山系保全協会」(Central Nakanai Mountain Ranges Conversation Association)の立ち上げと、自然保護区への認定を求める活動を開始したとのこと。総面積8億1860万ヘクタール。メンゲン・スルカ語族の慣習的土地所



▲セントラル・ナカナイ山系保全計画地

有の一端に属しています。

この豊饒な森への伐採企業の圧力は、長年つづいてきました。その圧力のなかでの住民の連帯が、広域保全として始動しようとの動きが始まったのはうれしかぎりです。現在パプアニューギニア政府の環境保全庁(CEPA)にその地域の認定を求めている段階です。

イギー・マタピアさんとともに、保護地区認定への働きかけを政府に行なっているフランシス・パボゲさん(マラクル村出身)の作成したレポートによれば、保護区としての認定された後は、「REDDプラス」プロジェクトの導入を視野に入れているように見えます(「REDDプラス」については注を参照)。しかしこのREDDプラスについては、NGOのあいだで多様な意見があります。外部の団体の介入によってその地域を囲い込み、炭素蓄積量にしたがって森林資源を評価することへの批判、本当に住民のためになるのか。単純に原生林を守るのではなく、炭素量の含有で森を評価しながらプロジェクトを進めることは、住民以外の外からの介入で、地域の動向が左右されるなど。

いずれにせよ、イギー・マタピアさんとフランシス・パボゲさんからの便りに共通していることは、まずは域内の森林状況の測定をする必要があり、その費用のために森を守る会からの支援をしてほしいということです。

伐採企業からこの地域をどうしても守りたい、オイルパーム・プランテーションには転換したくないという強い望みと熱意からたちあげたイギー・マタピアさんたちの意向に沿うように、果たしてこのプロジェクトが望ましい方向に行くのか。どのような具体的な内容を含むのか不明な点が多く、森を守る会としては、現地とコミュニケーションをとり続けながら、検討課題としていきたいと思ひます。(2023年5月)

注) REDDとは、直訳すると「森林減少・森林劣化からの排出削減」。森林減少・森林劣化を防止することによって、排出されるはずだった二酸化炭素を削減する(森林に吸収されるはずだった二酸化炭素吸収量の減少を防ぐ)というとりくみをさす。これに森林保全、森林の持続可能な経営などを活動対象に加えたREDDプラスが、2007年に削減方式として認められた(パリ行動計画)。REDDプラスの要件として、天然林および生物多様性の保全や先住民および地域コミュニティの完全かつ効果的な参加などがあげられている。

追悼3人のリーダー

森の暮らしを愛し原生林を守るために 生命をかけて生きてこられた3人の方たち

清水靖子

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」が30年以上にもわたって連携してきた3人のリーダーたちが、病に倒れられて帰天されたというニュースに接しました。もう一度お会いして、たくさんのお礼を言いたかった方々です。

マーロン・クエリナドさん

ゴゴール溪谷の森の暮らしを愛し、その暮らしを描きつづけた画家

マダン州のゴゴール溪谷の出身で、森の暮らしの記録を、墨一色で生き生きと描いてこられたマーロン・クエリナドさん。2016年4月12日に、首都ポートモレスビーで心臓発作のため帰天。55歳でした。日本の皆さまにとっても、忘れ得ぬマーロンさんであったことと思います。

マーロン・クエリナドさんは1960年6月25日、マダン州のゴゴール溪谷のベリン村で生まれました。当時のゴゴール溪谷には、極楽鳥の森、水辺の暮らし、森の狩り、祭りのクンドゥ・ドラムの鳴り響く暮らしがあり、マーロンはそのようななかで育ちました。

1973年、日本の本州製紙（JANT社）は、マーロンが13歳のときに、その森を見渡すかぎり皆伐して、チップにして、本州製紙（現王子ホールディングス）の鉋路工場で、段ボールや紙の原料にしてしまいました。以後JANT社は世界各地からの反対の声にもかかわらず、その伐採をつづけてきました。

皆伐後の広大な大地に、製紙原料用に植えられたユーカリは、大地を一層砂漠化させ、ゴゴール溪谷は、水も食料も失っていきます。

1991年、マーロン31歳のときに、私は首都ポートモレスビーでマーロンと出会い、日本で私が執筆中の本のために、彼に絵を描き下ろしていただけないかと頼んでみました。星のような瞳を輝かせて、「それは私の喜びです」と語ったマーロン。1993年にその絵が届きました。私は、「段ボールになった極楽鳥の森」という一章で始まる、『日本が消したパプアニューギニアの森』（明石書店）に、その絵を使わせていただいて1994年に発行しました。

この時期は、パプアニューギニアでの熱帯材輸出が300万立方メートルに達し、その64%もが日本に輸出されていたのでした。

マーロンを招こう!! そう企画した森を守る会は、1996年にマーロンの個展を銀座で開きました。このときマーロンは、本州製紙のある鉋路や、東北のブナ原生林の奥地にも足を運びました。

多くの方々がマーロンの絵に魅せられました。そのなかのひとり自由国民社の編集長が、その絵をもとに絵本の制作を企画され、マーロン・クエリナド、清水靖子による共著『森の暮らしの記憶』（自由国民社）が1998年に発行されることになりました。

パプアニューギニア全土の大干ばつのときには



▲マーロン・クエリナドさん（2014年11月30日）

(1997年)、ゴゴール渓谷は悲慘の極みの状態になりました。川の水なし、地下水なし、食べ物なしのなかで、人々は水を求めてさまよい、マーロンの母親は「これしかない」と小さなタロイモ（親指の先ほどの大きさ）を見せてくださったほどでした。そのような干ばつのなかでもJANT社は操業を続け、その後2004年になって撤退しました。

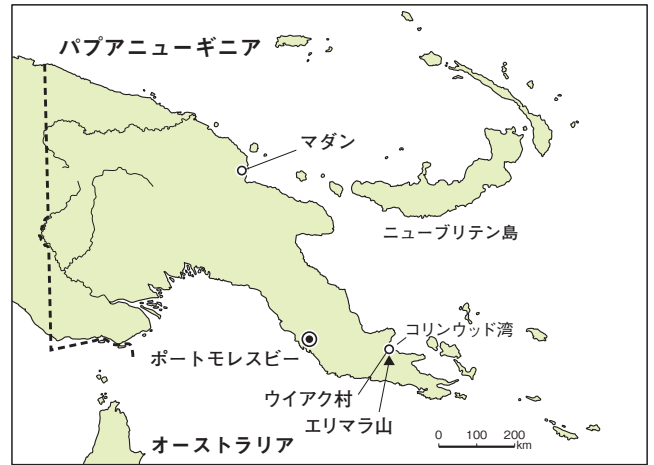
『森の暮らしの記憶』はパプアニューギニアでも話題を呼び、教育庁がその英語版を出版する（制作はオーストラリア）にいたるほどでした。マーロンは首都の教育庁のテレビ制作部門に勤め、その後はパプアニューギニア大学の美術の教授となっていきます。

2013年11月3日に、私たち森を守る会は、首都の空港でマーロンと朝食をともしました。そのとき手渡してくださったのが、彼の私たちへの遺作ともなった祭りの絵でした。

2015年以降、彼からの音信不通がつづきました。その1年数か月後にマーロンは帰天されていたのですが、私たちは2022年に娘のジョゼフィン・クエリナドさんから連絡があるまで知らないままでした。ジョゼフィンさんによると、マーロンは喘息持ちで苦しんでいたがそれが悪化し、2016年4月12日に心臓発作で倒れ、病院に急きょ運ばれ、そのまま帰天されたとのこ



▲マーロンさんを囲んで、森を守る会の清水、池田、辻垣（2013年11月3日）



とでした。

「父マーロンは、日本の人々は、墨一色で描いた絵が好きなのだよと言っては、大学での仕事を終えた後、夜な夜な絵を描きつづけ、また日本での思い出をいっぱい話してくれました」「父の最大の望みはゴゴール渓谷を再び森にすること。その森とかつての暮らしへの思いに生きた父でした」

マーロンの森を奪った私たち日本。私たちはマーロンさんの深い思いと悲しみとその絵を、日本の多くの人々に伝えつづけることによって、マーロンさんに応えていきたいと思います。

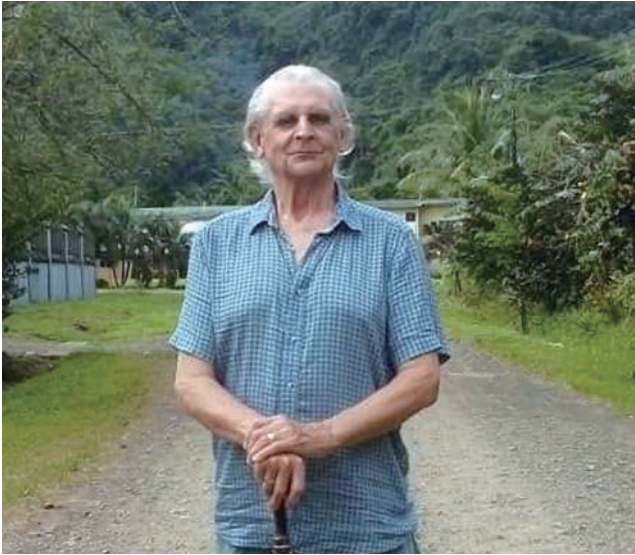
ブライアン・ブラントンさん 森を守るために生命をかけた法律家

ブライアン・ブラントンさんは、イギリス出身で、若いときにパプアニューギニアに移住し、パプアニューギニアの森を守る法律家として、あらゆる側面での調査、裁判活動、そして連携の中心人物でありつづけた人でした。2022年10月14日に、アロタウにて心臓発作で倒れられ帰天。

パプアニューギニアにブライアン・ブラントンさんありき!! 伐採企業との裁判に勝つこと数知れず、伐採企業が怖れる法律家、それがブライアンさんでした。

私がパプアニューギニア調査旅行を初めて行なった1990年以來の友だちであり、唯一無二の調査指南をしてくださった方でした。

厳しさと優しさ、鋭い観察力と温かさ、ユーモアも



▲ブライヤン・ブラントンさん

かねそなえた人間味豊かなブライヤンさん。パートナーのキャロルさんともども、お二人の家に宿泊させていただくこと幾年月。伐採企業と政府の高官が密かに会うレストランに私を連れていって密会現場を見せてくださるなど、数々の実地指導まで惜しみなくくださった方でした。

森を守る会としても、彼を日本に招いて上智大学などで講演していただきました。歴史に名だたる不滅のバーネット・レポートの筆者、トマス・バーネットの唯一無二の友でおられたのにふさわしく、日本の並みいる伐採企業と商社が行なってきた価格移転操作の真実を解き明かした講演をされ、さらなる真実解明を求めて調査のために東京港へ赴きました。

私の修道院に宿泊され、周辺を歩いては、「僕はこうした小さな店、飲食店などが並ぶ町並みが好きだ。大きなところではなくてね」と言われたことが印象的でした。パプアニューギニアでも、スーパーマーケットに行かずに、路上マーケットや、魚市場で買い物して、自ら魚をさばき料理するというタイプの人でした。

ブライヤンは1990年までパプアニューギニアの最高裁の判事でした。その立場から、「パプアニューギニアの原生林を守る最良の方法は、丸太輸出禁止であるとの提言」を世界銀行に提出。その提言が政府や世銀の逆鱗に触れ、左遷されて高地のゴロカへ判事として送られたブライヤンさんでした。しかも、そこで判事として死刑の判決を出さなければならない事態に追い込まれたとき、判事として死刑の判決を拒み、判事の職を辞したのでした。

以来、原生林を守る村人のための弁護士となり、首都のポートモレスビーで弁護士事務所をパートナーのキャロルさんとともに立ち上げたのです。裁判では、巨大伐採企業のリンブナン・ヒジャウ社と対決し、また日本の本州製紙のJANT社の操業に対しては、その操業延期に反対の票を投じてJANT社の社長の怒りがかったということもありました（ブライヤンさんは市民代表として森林省の会議のメンバーに選ばれて評決に参加したのです）。

娘のロザリンによれば、ブライヤンさんは近年、視力の低下のため杖をついて外出するようになったが、最後まで法律家としての活動を継続していたということでした。

2022年9月ごろから体調不良となり、両腕に痛みを訴え、検査のために病院に向かう直前に心臓発作を起こし、運ばれた病院で10月14日に帰天されました。

写真は帰天される少し前に、住んでいたミリンベイ州のアロタウの家の前での写真です。

フランクリン・セリーさん

コリンウッド湾の奥地エリマラ山の原生林を守ってきた指導者

押し寄せる伐採企業の波から故郷のウイアク村を含むコリンウッド湾（ニューギニア島東南端付近）の原生林を守りきった、マイシン語族の魂と呼ばれるにふさわしい人でした。

息子のレスター・セリーさんからの知らせで帰天を知りました。最近体調が悪かったが、村では治療もできなかつたとのことでした。2022年11月15日に心臓発作で帰天、73歳でした。

1949年にウイアク村に生まれ、各地で教師としての仕事を経て、故郷のウイアクに戻られ、故郷の森を守ることに生涯をかけられました。

ある日伐採企業は、指導者である彼を首都に連れてゆき、贅沢三昧での食事でもてなした後、「伐採企業を招けば、こんないいことがありますよ」と並べ立て、「どうですか。伐採許可をくれますか」と言ったそうです。彼は、「エリマラ山の大地と森は、私たちの祖先が生命がけで守ってきたのだ。私も生きていくかぎ



▲タバを披露するフランクリン・セリー氏

り森を売ることはないよ」と答えたそうです。

フランクリン・セリーさんの詳細については、次の辻垣さんの文章にバトンタッチします。

以上、パプアニューギニアの原生林と大地を愛して生命をかけた3人の帰天は悲しいことではありましたが、森を守る会として、その生きざま、そのメッセージを埋もれさせることなく、日本でもパプアニューギニアでも伝えつづけて、その思いに応えて行くことが、私たちの使命であると思っています。

(2023年3月)

フランクリン・セリー氏 逝く

代表 辻垣正彦

パプアニューギニアのウイアク村（ニューギニア島東南端付近）の指導者であったフランクリン・セリー氏が73歳で亡くなったとの連絡が伝えられた。

1994年1月、カトリック藤沢教会にて「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」の結成記念集会が開催された。翌年、パプアニューギニアから全国女性法律家連盟のウルスラ・ラコバさんとフランクリン・セリーさんを招いて各地で講演会とタバ展（樹皮のタバストリー）を開催し、日商岩井（現双日ホールディングス）、日本建築家協会へ陳情にも行った。

講演でフランクリンさんは、村では「女も男も子ど

もも一致して森を売らないと決めたこと、森を失えば水も薬草も果実も豚などの生き物も失い、村人もそこに住むことができなくなり、都会へ移住せざるをえず村は崩壊し、皆が散り散りとなる」と訴えた。

当時、日本はパプアニューギニアの木材の64%を輸入していた。

電気・ガスがなくとも森さえあれば豊かに暮らしてゆけるパプアニューギニアである。冷蔵庫も蔵もなく物を貯め込むことができないので、村では貧富の差がほとんどない。いわゆる先進国である日

本・米国・中国に代表されるお金をとことん追求するグローバリズム経済諸国とは異なる文化を持つ生活を何万年も前から持続してきた。

人類の原点を生き続けてきた民族である。

東京・銀座教会で開かれたタバ展で、タバに囲まれて伝統的祭りシンシンのスタイルで、民族衣装を身に着け、極楽鳥の羽根で飾られた装飾品をかぶり、太鼓を叩きながら伝統ダンスを踊って我々を楽しませてくれたフランクリン・セリー氏を思い出す。

当時、日本は世界一の熱帯木材の輸入国であった。今でも日本人の意識は変わらず、原木ではなく合板や製材加工品として、国土の70%が森林にもかかわらず、熱帯材を大量に輸入している。熱帯雨林、低開発国の資源を食いつぶしつつ経済を活性化させるという反省なき資本主義を突き進んでいるのである。

フランクリン・セリー氏はこう主張した。「私たちの森が裸になっていくのです。特に女性や子どもたちが苦しんでいます」と。その主張は、手を替え、品を替え、法律を替えて熱帯林を破壊しつづけているこの混沌とした世界の裂け目を案じるように、現在でも耳に響いている。

フランクリン・セリー氏の願いに近づくことが人類の平和を実現する基本であると気づき、熱帯林を守り村人の人権を守らなければ人類の未来はないことを改めて心に刻みたいと思う。これからも意志を継いで「森を守る会」は続けなければならない。 合掌

新刊書紹介

『アジア太平洋の民族を撮る―「すばらしい世界旅行」のフィールドワーク』

市岡康子著、弘文堂刊

「すばらしい世界旅行」は1966年から1990年まで日本テレビ系列で全国放送されたドキュメンタリー・シリーズで、40代半ば以上なら記憶にある方も少なくないだろう。著者はこの番組の開始から終了まで24年間、アジア太平洋の民族を専門に取材したディレクターである。制作には異文化のなかで、毎回違った民族の間でのフィールドワークが不可欠であった。その実相を、記憶だけでは立ち戻れない臨場感にあふれたフィールド日誌に依拠して表現している。また豊富なカラー写真、文中のモノクロ写真も現地のイメージを豊かに醸成している。

取り上げられた地域と内容は以下の通り。

トロブリアン諸島の女たち／シベルート島深奥部の先住民／ニューアイルランドのサメ漁／中国雲南省の白族／カンボジアの神がかり／石器時代から現代までを生きたダニ族の大酋長／北タイの山地民アカ族／ニューギニアの部族戦争

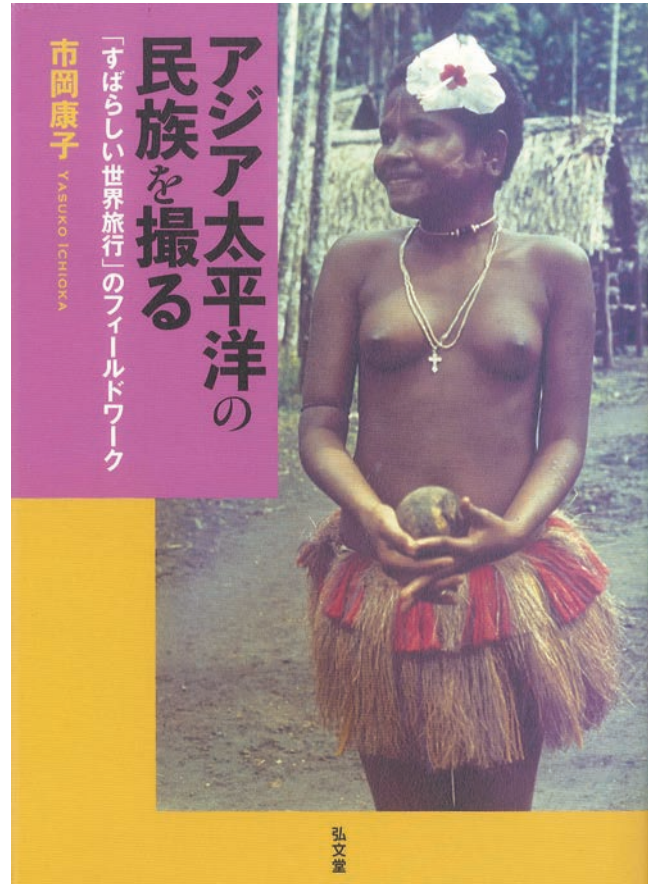
カルリ族の歌合戦ギサロを制作したニューギニア深奥部のボサビ山では、映像制作からボランティア活動にすすみ、草の根開発の試行錯誤に発展する。

著者のプロフィール

1939年中国長春生まれ。東京都立大学人文学部卒業。1962年日本テレビ入社、牛山純一プロデューサーの開拓した、日本最初のドキュメンタリー番組のひとつ「ノンフィクション劇場」でドキュメンタリー制作に入る。1972年テレビ番組制作会社「日本映像記録センター」設立に参加。1966年から1990年まで「すばらしい世界旅行」のディレクターとしてアジア太平洋の民族を民族誌的な視点から記録した。

2001～07年 立命館アジア太平洋大学教授

著書に『KULA ― 貝の首飾りを探して南海をゆく』（コモンズ刊、2005年）がある。



▲『アジア太平洋の民族を撮る―「すばらしい世界旅行」のフィールドワーク』市岡康子著、弘文堂刊 3850円

※編集者注：前記の本『KULA』は、パプアニューギニアのトロブリアン諸島におけるカヌー船団による島々の伝統的な交流をドキュメンタリーで制作、放映した際の大変貴重な記録です。1922年にプロニスワフ・マリノフスキーが長期間にわたる現地でのフィールドワークをもとに島々の伝統を『西太平洋の遠洋航海者』として発表し、文化人類学に偉大な業績を残したことが有名です。その伝統を現代的な視点で追跡したもので、「映像人類学」という新しい分野を切り開いた実績があります。

1995年には、清水靖子、辻垣正彦らとともにパプアニューギニアのニューブリテン島への調査旅行に参加し、「蝶プロジェクト」の提案をしました。

パプアニューギニアで日本語教育が行われてきたことをご存知ですか

事務局 倉川秀明

このたび、パプアニューギニアにおける日本語教育についてまとめた本が出版された。

『パプアニューギニアの日本語教育 — 40年の軌跡とその意義』

荒川友幸、長岡康雅、西村祐二郎編

2022年9月19日発行、Amazonオンデマンド出版、2420円

パプアニューギニアでは1980年から今日まで日本語教育が行われてきたが、一般にはあまり知られていないと思う。このたび、現地で日本語を教えた経験のある教師が、その歴史と意義についてまとめた本を出版した。

その目的は、パプアニューギニアの日本語教育を記録に残すことと、ほとんど実用的な価値のない海外の地域、「日本語教育にとっての辺境」における日本語教育の意義を確認することだという。

パプアニューギニアにおいてこれまで日本語教育が行われてきたのは、ソグマリ国立高校、パプアニューギニア大学、セントイグナシウス高校、ゴロカ大学であ

る。この本では、それぞれの施設で日本語教育を行った教師が、その実際の記録と意義と経験のいかんについて記述している。そして、日本語教育にとっての辺境での日本語教育の意義、学習者側（学生）の感想、第二次世界大戦中の日本軍による学校教育と現在の日本語教育とのつながりなどについて言及している。

私も、1990～1992年にソグマリ国立高校に日本語教育専門家として国際協力機構（当時は国際協力事業団、JICA）から派遣されていた経験がある。派遣の経験は、それが契機となって今日までいろいろな形でパプアニューギニアと関わるようになり、また国際協力の道へ進むことにもなった貴重な機会だった。私も、当時の教育活動の記録と経験について一章を書いている。

本書は、パプアニューギニアと日本という二つの国の関わりとそこに携わった人々との人生や生き方について、日本語という軸を通して新しく見直すことができる貴重な題材だと思う。ぜひご覧になっていただきたい。

※本書は、Amazonでのみネット販売していて、一般の書店では購入、注文はできません。

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」はこんな活動をしています

- ①熱帯雨林の豊かさと暮らしを守る活動。現地住民との連帯・交流・支援、商業伐採による自然破壊やその影響に関する現地調査
- ②熱帯雨林伐採後のオイルパーム・プランテーションやユーカリ“植林”問題の追及
- ③日本国内における国産材の使用と熱帯材不使用の促進
- ④原生林を守る村々へのスタディー・ツアーの実施
- ⑤日本での報告会、講演会、現地ゲストを招いての集会・絵画展の開催など
- ⑥ニューズレターの発行とDVDの作成
- ⑦干ばつ・津波被害の被災地への調査と救援活動
- ⑧執筆活動

「森を守る会」は上記の活動を柱として、国産材による建築を自らも実践しつつ、熱帯材不使用を訴えています。また現地で原生林を守る村々、特にニューブリテン島南岸のマラクル村やムー村などの人々と連帯して、彼らの森を守る活動や裁判活動を継続して支援しています。

ホームページもぜひご覧ください。⇒<http://www.pngforest.com/>

ボランティアも募集中！ 自分自身の問題として、いっしょに原生林を守りましょう。

『新版 森と魚と激戦地』三省堂書店 からいよいよ発刊 6月19日から全国の書店で発売

お待たせいたしました。『新版 森と魚と激戦地』がいよいよ発行となります。

数々の激励とご支援、ご指導に深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

地球の片隅にこんな出来事があったのか？ ^{かんこうれい} 箆口令のままに、大本営の発表のままに、歴史の闇に埋もれさせてしまっはならない出来事の数々を、森と海と大地からの叫びにあわせて綴り、皆さまにお贈りします。

かつての北斗出版版（1997年）から26年の歳月を経て、現地側の変貌^{へんぼう}とともに、多くの内容を新たに盛り込みました。

太平洋戦争当時、日本軍によって虐殺され、犯されてきた住民による生命がけの抵抗。特に女たちの抵抗と知恵と勇気の物語。夜空に輝く星のきらめきと涙のような数々の秘められた物語と出来事。一方で、読者の皆さまが、「えっ？そんなことがあったの？」と驚かれる、「海軍による捕虜への生体実験」という冷酷無比な行為の実態にも迫りました。海軍や陸軍の上層部が処罰も受けずに、戦後の日本の社会に入り込んでいく実態を見逃すことはできません。

さらに、かつて戦車で踏み込んだ岸边に、戦後はブルドーザーで進出し、森を伐り、生命の樹を日本に運んで恥じない日本。巨大延縄漁船や巻き網漁船で海の幸を総なめにして奪いながら、それを享受してきた私たちの暮らし。

かけがえのない森の暮らしの魅力と、地球最後の原生林の水辺から発せられる子どもたちのメッセージは、私たちに回心と、今をどのように生きたらいいのかを問いかけています。

この新しい『新版 森と魚と激戦地』の発行にあたっては、現地と日本側の両方の聞きとりと資料を重視して検証にあたり、それらを本文の補足と注に記しました。そのためページ数が多くなっています。現地と日本での多くの方々協力によってできあがった渾身

5月末に完成

清水靖子

の作です。

最後に、編集者の荒川俊児さんのかぎりない尽力と、「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」からの後援に、深く感謝を述べたいと思います。

別途ちらしも作成しました（本誌に同封）。多くの方々に配布していただけたら幸いです。ちらしは「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」へ連絡くだされば、さらにお送りいたします。

●購入方法●

『新版 森と魚と激戦地』の購入は、お近くの本屋さんにて予約・注文してください。インターネットからは、Amazonで予約（予約受付中）・購入できます。また、地元の図書館に購入をリクエストいただくとありがたいです。

『新版 森と魚と激戦地 はじめて明かされる太平洋の住民たちの受難と抵抗』

著者：清水靖子

発行：三省堂書店／創英社

発行日：2023年6月18日

定価：2970円（本体2700円＋税10%）

ISBN978-4-87923-204-5 C0022

（データベースに反映する6月下旬より有効）

四六版 カラー口絵・地図・写真入り402ページ

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

ニューズレター『太平洋の森から』第43号

発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206

辻垣建築設計事務所内 電話03-3492-4245

郵便振替口座 東京00100-1-614216（パプアの森）
年会費 3000円

ホームページ <http://www.pngforest.com/>

DTPレイアウト：荒川俊児、印刷：グラフィック

